

「HSK 季刊わたぼうし」 第57号

発行者:わたぼうし連絡会

発行日:2002年(平成14年) 3月3日 '02春号

第57号の特集

平井誠一さんと浅木裕美さんとの懇談会

うぐいすの 声を求めて 録音機

比呂雪

この機関紙は障害のある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

## 特集 《平井誠一さん・浅木裕美さんとの懇談会》

テーマ:私たち(当事者)は何をすべきか、世の中の働き

### はじめに

「誰もが住みやすい地域を作るためには」をテーマに、昨年11月より青山彩光苑の利用者が6名、地域の方が1名、職員4名のメンバーで自らが啓発活動（コミュニティバス誘致活動）を行っています。

2001年11月15日（木）にその活動の一環として、NPO法人「自立生活支援センター富山」理事長・平井誠一さんと職員の浅木裕美さんを迎えて懇談会を行いました。その報告をさせていただきます。平井さんの紹介は前号をご覧ください。

**出席者：**青山彩光苑職員（北口登志子さん、藤井哲雄さん、前田晋さん、九十若葉さん）。青山彩光苑利用者（西島英夫さん、江沢稔さん、桶屋善一さん、久保真弓さん、奥美嘉子さん）、地域住民（藤井裕さん）。

### 平井 誠一さん（自立生活支援センター富山）

こんにちは。「自立生活支援センター富山」の平井誠一です。

最初に「自立生活支援センター富山」について説明をします。昨年11月にNPO法人を取りました。「NPO法人」についてご存知のない方もおられると思います。「阪神淡路大震災」の時にボランティアの人たちを支えていこうということで、その後、法律の中で「特定非営利活動法人」という法律ができて来ました。

最近、障害者福祉の分野ではデイ・ケアを行う所もNPO法人で行っていますけれど、僕らのように自立生活センターをつくっている所が、全国で100ヶ所近くあります。

僕らの自立生活センターは文字通り、障害者が自立生活を支援する事業を行っています。障害者自身が障害者の生活支援を行っていこうと動いている団体も多くありますが、その中で市町村の障害者支援事業というものがあります。これは国のメニューで市町村が実施しているものです。

### （1）障害者支援事業の内容

### 浅木 裕美さん（自立生活支援センター富山）

こんにちは。「自立生活支援センター富山」の浅木裕美です。よろしく申し上げます。

悩みや相談にのって欲しい。相談という観点から見ると、とりあえず話を聞いて欲しいという人が多いです。自分の話を聞いてくれる機会がないから、相談に来ました。そして本当は話を聞いて欲しい。

話を聞く方法としてピア・カウンセリングがある。ピアとは、仲間とか同じ背景を持っているもの同士。私たちがいう「ピア」とは、障害を持っている同士という意味。

「カウンセリング」というと病院の医療的なイメージはありませんか？ 私たちのピア・カウンセリングでは医療的なことは一切なくて、お互いに話を聞き合うということ。

一般的なカウンセリングだと先生と患者さんという関係になって「先生に話を聞いてもらう、治療をしてもらう」というような感じで、同じ高さではなく先生の方がむしろ上という感じです。医者と患者さんの関係は絶対に変わらないという感じです。一方的な関係です。

私たちが行っているピア・カウンセリングは上下関係があるわけでもなく、障害を持っている人同士がカウンセラーとクライアント（相談者）という関係ではなく、お互いに同じ立場で話して、話しに来た人が一方的に話すのではなく、聞く側も話をする。お互いに話を聞き合うということが基本です。「相手のことを知らずに自分のことを言えない。」ということが本音だと思います。話を聞き合う中で一方的に話すのではなく、お互いに話を聞き合うことが大事なので、カウンセラーとクライアントが回じ立場で本音を言い合う。障害を持っていない人に言っても伝わらない部分があるので、相手も障害を持っているということで理解し合うことができる。

## （２）自立生活プログラム

例えば、その人によって経験不足の部分とか、人と話すことが苦手な人がいた場合に、段階を踏んでいってどうすれば、自分が自分らしく話すことができるようになるのか、人と付き合うことが上手になるかを考えて(1)～(5)のようにプログラムを組んで、今日はこのテーマ、次はこのテーマでやってみようという、その人に適用したメニューを作り最終的な目標に向かっていくという方法で行っています。

**平井：**例えば、料理をつくるというメニューがあります。その場合、桶屋さんのように包丁が握れない人がいます。でも、包丁を握らなくても自分好みの味付けができるようになるということをプログラムの中で行っています。

**浅木：**決して、自分で料理を作れるようになるのではなく、自分がこのようなものを食べたい、こういうふうに切って欲しい、調味料の分量、カレーの場合自分がにんじんを嫌いだったら、にんじんを入れないで欲しいなど、自分の思いを相手に伝えることができるか、どうかが大切です。

**平井：**個別によってこのプログラムが違ってくる。このプログラムはその人が何を望んでいるかによって、違ってきます。

**浅木：**自立は一つだけでなく、その人なりの自立プログラムを作っていく。

## （３）ガイドヘルパー派遣サービス

ガイドヘルパーを日本語に直すと、外出支援です。荷物を持って欲しい。出かける時に送迎をして欲しい。食事・排泄介助をお願いしたい。などを含めて外出をする際の支援をしますということです。

これは利用者も、援助をする方（アルバイト）からも会費を取って相互扶助という形で会員制にしている。

#### （４）アドボカシーサービス

障害を持っているゆえに、差別的な行為を受けたり、侵害を受けたりしてしまって職場から解雇されたりする場合。

**平井：**僕らが相談を受けてやってきたのは、知的障害者の人が親戚の方にお金をだまし取られて、お金を取り戻したいということで、今、裁判を行っている人がおられます。そのような具体的なことに対して支援をしています。

例えば、裁判になると僕らの管轄以外になってしまいますが、弁護士さんと連携をとりどう進めていくかを相談しながらやっています。

#### （５）講師派遣・福祉教育プログラム

**浅木：**小、中学校、高校、社会福祉協議会から依頼を受けて「バリアフリー、福祉サービス」などの説明を行っています。最近、学校の授業で福祉の時間、国際交流、環境について学ぶ時間ができたので行っています。

学校の先生が障害を持っている人について話すのもいいのですが、やはり障害を持っている当事者が話すべきでなかろうか。実際に学校などに入っていろいろな人と実際に話をして理解して欲しい。外から話していても伝わらないので、直接会って、目を見ながら話していきたいと思っています。

講師は私たちだけでなく、ガイドヘルパー派遣サービスを利用しておられる人になってもらったりしています。障害を持っている人は私たちだけではなく、いろいろな人がいることを知ってもらいたいと思っています。

**平井：**あと僕らが行っているのは、事務所の近くの郵便局に一段だけの段がありましたので、スロープを付けて欲しいという申し入れをして、現在では付けてもらいました。「このようにして欲しい、あのようにして欲しい」という要望を取り入れながら、街の中で使いにくい所を変えていこうという運動をやっています。

今からはビデオを見ながら説明をします。このビデオは小・中学校でも使わせてもらっています。

今、見ていた・だいているのは「ノン・ステップバス」です。富山駅から市民病院に向けて走っています。富山市内を走っている路線バスです。これは車いすのまま乗れるように造られたバスです。運転手がボタン一つでスロープが出てくるように造られています。電動車いすだと介助者なしで乗られるバスが走っています。

金沢市内だと結構走っていますが、七尾はまだ走っていないですか？

**浅木：**バスがらみで一つ。富山市と高岡市にはコミュニティーバスというバスが走ってい

ます。環状線のようにくるくる市内を回って走るバスです。富山市では今年の11月から車いすが1台乗れるバスが走っています。高岡市も車いすのまま乗られるバスに変わってきています。

**平井：**このようなバスになったのは、25～6年前に僕たちが運動をやってきたので、全国的にこのようなバスが走るようになってきました。当然、交通バリアフリー法という法律ができました。駅や市町村でこのようなバスを走らせなさい、という法律ができました。2～3年のうちには、七尾でも走るようになると思います。

これは富山駅の地下道です。(ビデオ) 車いすのまま通れるように造ってあります。右側が階段、真ん中がエスカレーター、左側がエレベーターというような造りになっているものが、今やっとできてきました。アメリカ、ドイツのような外国にはこのような造りが、一般的に多くなっています。

なぜ、このような造りになっているかといいますと、障害のない人でも体の調子が悪い時に、「エスカレーターを使いたいとか、エレベーターを使いたい」と言う人がおられる。最近、高齢者の方で「今日は足が痛いから、一緒にエレベーターに乗ろうよ。」と言われる方もおられるのです。今後、体調に合わせて選べるこのような造りが増えてくると思います。最近、前から乗って前に進んで行って降りるエレベーターです。普通のエレベーターは降りる時、バックしたり、方向転換をする必要がありますが、このエレベーターは前進で降りられる。また、前から乗って横から降りるエレベーターも出て来て、便利なものが増えてきました。

日本の電話ボックスは四角ですが、ドイツの電話ボックスは六角形です。電話ボックス中で車いすが回転できるようになっています。日本の電話ボックスは入る時は良いが、出る時に不便です。

現在、公衆トイレは障害者専用から多目的トイレに変わってきています。昔だったら障害者専用のトイレを造ってきたのです。今、いただいているのは、大人用洋式トイレ、その左側に子供用洋式トイレ、その左側に赤ちゃんのおむつ交換のベットが付いています。最近、このようなトイレが増えてきました。

JRのサンダーバードですが、4号車の11、2番は車いす用の座席が1個取ってあります。こ車いすから座席に降りて、座席に移ってから車いすを座席に固定ができるようになっています。

富山駅は昨年(2000年)、国体(きらりんピック富山)があったので、大分改装されています。このようなことも障害者がいろいろな運動をやっている中で、昨年4月からバリアフリー法が施行されました。ここまでなるためには、障害者の方々が外に出るということを経験やってきたり、出ることによっていろいろな状況を調査してきました。

バリアフリー法が提出された当時、民主党案と自民党案が出ていました。法律が両方の党から案が出された時に、障害者団体に意見を求められました。それで中身も変えられて二つの案を合わせられたような物が作られてきました。

社会的にはいろいろと変わってきているのですけれど、2003年から障害者福祉制度が

大きく変わろうとしています。今までの措置制度から、いろいろな問題がありますが、障害者が施設やいろいろなサービスを選択ができるようになります。

現在のところ、国から具体的な案が出されているわけではないが、僕らから要望事項を国の方に言っています。バリアフリー対策についても、お役所仕事でただ設備を付けておけばよいという考えがあります。

現在、僕らが進めているのは社会を大きく変わろうとしている中で、障害者自身が事業を行っていかうということで、国や市町村の委託事業を受けてそれを行っていかうという流れがあります。

障害者側から法律を提案していかうということで、いろいろな法律を国会に提案するという流れも結構増えてきています。昔のように「こうして下さい。お願いします」ではなく案として提案していく方向に変わってきています。

それを踏まえて、僕が行おうとしているのは「市町村障害者生活支援事業」年間1,500万円の事業です。それを受けて障害者の相談業務を事業としていかうとしています。1年半前から準備をしてきています。

そのような中で、僕たちが現在、とりわけ力を入れているのは、障害者たちがよくなるには一般の健常者が変わってもらふ必要があると思って、健常者の意識を変えていかうという運動です。健常者でも子供たちの意識を変えて行ってもらおうと講演会を行っています。

**浅木：**講演会と言っても「バリアフリー」の話が主にしています。バリアフリーについてどれだけ知っているかを聞いてみましたら、わからない人が多いです。「バリアフリーは障害者のための言葉みたいよ。」という感じです。住宅のバリアフリーのようにバリアフリーという言葉はテレビのコマーシャルでも広く使われています。私たちはバリアフリーについて3つのバリアを上げています。

### ①物質的なバリア

段差や階段のように目に見えるバリア。

### ②心のバリア

人と人の関わり合いでのバリア。障害者なんかに話しかけなくても良いわという感じですね。

私と平井さんとはよく県外に行くことが多いです。私も障害者ですが、平井さんの車いすを押して駅や空港に行っています。駅員さんとか空港の人は「え〜と」と話しかけてくるのですが、たいがい私に話しかけてきます。絶対に車いすに乗っている人に話しかけをしないで、車いすを押している人に話しかけをしてきます。「この人に何を言っても、わからないから」と言われます。

障害を持った人が風邪を引いて病院に行った時も、本人に何も聞かないで介助者に聞くのですね。介助者に聞いても、本人でないのだからわからないでしょう。障害を持っている人をいない人と同様に扱うというバリアが一番厚いです。

### ③法的（法律）バリア

交通バリア法という法律ができている反面、未だに障害を持っている人が実生活をしていく上で大きな壁となっている法律があり、それを欠格条項という法律です。

**平井：**昔あった欠格条項の中で、耳の聞こえない人が美容師になってはいけないという法律がありますが、科学や技術の進歩によって補聴器も進歩してきていますので、耳の聞こえない人も美容師になっていいように、法律が改正されてきています。

重度の障害者の方で介護の必要な方は市営住宅、公営住宅に入ってはいけないという法律があったのですが、その一部が改正されました。重度の方でも入ってもよいという要件が付け加えられました。

その他に、障害者は弁護士、裁判官になってはいけないという法律があるのですが、障害者の方が弁護士になっています。たぶん、本人がおられるのだから、このような法律もなくなっていくと思います。

びっくりするのは、桶屋さんよりももっと障害の重い方が市議員をやっておられます。言語障害が重くて言葉が聞き取れない方です。もう一人は静岡県の筋ジスの方が市議員をやっています。この方は夜に人工呼吸器で生活しておられます。

今までの常識が結構、覆られてきています。しかし、先日、浅木さんが車いすに乗って街を歩いたら相手にされなかったことがあります。

**浅木：**普通に車いすを乗らないでいる時は普通に対応してくれます。しかし、車いすに乗った途端に見向きもしないです。車いすに乗っている人への健常者の対応って何だろうって思います。「昨日、しゃべったでしょう、あんた」と言いたくなります。同じ所に行っても、車いすに乗った途端に私が相手にされず、上で会話がされているのですね。「こっちへ向いてよ。こっちにも人がおるのよ。」としゃべっても、しゃべっても聞いてくれない。」車いすに乗っている人への見方がすごいのだなと思いました。

障害者のマークは車いすマークではないですか。だから、障害者イコール車いすという、イメージがあります。いろんな学校に行っても「車いすの人は、車いすの人は」と聞かれます。障害を持っている人でも、車いすに乗っていない人はたくさんいるし。

私は障害者の浅木裕美と思ってもらって欲しいが、障害者のくくりの中に入れて欲しくない。「障害者は」、「障害者たち」などのくくりの中に入れて欲しくない。「最近の若いやつ「17歳」とくくらないで欲しい。

**平井：**このような健常者の意識を変えることも、僕らの仕事だと思っています。いろいろな学校とか、地域の子供たちと話す機会を多く持つようにしていますが、鋭い質問があります。「障害者になって得をしたことがあるか？」という質問が来ます。「何を得しただろう」と考えながら答えています。思ったことを何でも言うので、戸惑っています。

**浅木：**逆に年齢が下がれば、下がる程、言った言葉をそのまま受け取ってしまうので、間

違ったことは言えません。言葉だけを受け取ってしまうから、中身まで考えてくれません。

しかし、それを逆に考えると、言ったことがそのまま入っていつてくれるので、伝え手としては意識は変えやすいです。だから間違っただけの言い方はできないのです。

バリアフリーにしても法律ができたら変えてくれるだろうとか、そのうち変わるだろうとか、というようなことは言ってはいけません。

私は五体満足なのです。今回、こういう機会があったので、参加させていただきました。

先程、言いました障害者のマークですが、それと同じように車を運転される高齢者の方が貼っておられる「高齢者マーク」とか、女性の方の運転を見て恐いなーと判断をするのです。

今、4時30分頃になると暗いですね。それなのに女性の方でライトを点けない人がいます。言っていないとなかなかおらないと思います。

私もホームヘルパーの講習を受けて、社会福祉協働会に行きました。車いすに乗せてもらって、エレベーターに乗りました。立っている人はボタンを押せますが、車いすに乗っている人はボタンまで届きません。このような経験がないと市役所などは直してくれないと思います。

障害のある人が主体となって動いていかないと、今の日本ではなかなかおっていかないとはいけません。

30年近く神奈川県川崎市の川崎にサラリーマンとしていたのですが、帰ってくるちょっと前に私鉄の駅のホームにエレベーターが付いたという状態です。七尾なんかはまだまだだと思っています。旅行をするにはこのような設備がないと、あってもホームの端にあるようではいけない。造れば良いというわけではないと思う。使う人の立場になって造って欲しいと思います。

私は青山彩光苑のバリアフリーホームで生活をしています。先ほど、バスをリフト付きにしたと言いましたが、どのようにされたのですか？

**平井：**昔はもっと過激でした。神奈川県で障害者の方々がバスに乗せろと行って、バスを止めたことがあるのです。バスに同乗して1週間ほど止めたことがあるのです。このようなことが日本全国で起こりました。金沢でもありました。

昔は障害者の意見をなかなか聞いてもらえないので、実力でバスを止めたことがあります。それから15年ほど経ってから、あちらこちらで障害者を乗せるためのバスを走らせるようになりました。たぶん、神奈川県が早かったと思います。僕は1991年にニューヨークに行きました。ニューヨークは市のバスの95%が車いす対応です。障害者が乗ろうと乗らないと走っています。

日本のバスがなかなかよくなるので、日本の障害者たちはアメリカのバスを導入して欲しいという運動を始めたのです。現在は日野自動車、三菱などの会社が造ってバス1台が約2000万円するそうですが、たぶん、多くのバス会社が買うようになると、もっと価格が下がるようになるのでは？とされています。

ただ、現在、法律ができていますので、それを盾にして当然、七尾でも走らせることがで

きるのではないのでしょうか？コミュニティーバスは金沢は金沢市、富山は富山市が運営しているのです。七尾でコミュニティーバスを走らせようと思ったら、七尾市だけでできるはずですよ。

私は青山彩光苑の療護施設を利用している一人です。今までのお話を聞いていまして、テレビ、新聞などの報道を見ていますと、最近の福祉はあまりよい方向に進んでいないと思っていました。ちょっとお聞きしたいのですが、ピア・カウンセリングを利用された方の反応はどうでしたか？

**浅木：**そんなに、たくさんの方が行ったわけではないですが、やり方や手法などで、皆さんがどのように受け入れられるかが心配でした。もともとピア・カウンセリングはアメリカから入ってきたものなのです。現在、定期的に行っている人が一人いるのですが、一緒にやっていく中で、泣いてくれたりして自分の感情を思いっきり出してくれます。ピア・カウンセリング自体が自分にとっていやなものだったら、1回も来ないと思います。

ピア・カウンセリングを行うときは、障害のない人はその場を離れてもらって、障害のある人だけの空間を共有します。そういう意味で安心できるということもあると思います。

相談業務の一番大切なことは、その場で言ったことは誰にも言わないことが第一の条件です。「誰にも言わないから、自分の思っていることを言ってみて。私も今、自分の思っていることを言うから。」と話をしたときに、障害を持っている人しかいないという安心感があるからか、すごく話をしてくれます。相談に来る度に内容が濃くなってきています。反応がいいと思います。

**平井：**先日、魚津市からピア・カウンセリングを依頼されて行ってきました。デイ・ケアの中でピア・カウンセリングを行いました。デイ・ケアに通ってきている方は20歳以降に障害を持たれた方で、60歳近くの年輩の方が多くおられました。

その方たちと、ピア・カウンセリングを行ったときに、ピア・カウンセリングの原則に基づいてはできませんでした。しかし、「よかった」と言われたのは、普段、デイ・ケアに来ている人たちがお互いに話すことがないので、和の中で「なぜ、障害を持ったのか。今どういうことを思っているのか。」ある時、具体的に出てきたのは「障害を持っている自分が差別される」という話をされた方もおられる。涙を流しながらそういう話をしておられたのですが、普段、デイ・ケアで顔を合わせているのですが、何を思って来ているのかを話すことができなかったから、「自分の気持ちを出せてよかった」と言われていました。

日本の福祉はバリアの部分で外国に比べて遅れてきますね。なぜ、遅れてくるかをどういうふうに分析をしていますか？何が違いますか？

**平井：**日本は障害者、お年寄りを保護の対象にしか見ていないように思います。外国はどちらかというと、権利が先に来ます。障害者にも権利があるというところから来ていまず、ニューヨーク市のバスが95%は、車いす対応になったという理由を市役所の方から説明

を受けました。「障害があろうが、なかろうが好きなときにどこでも出かけられる。出かけて行って働けることも大事だし、このようなバスを走らせることによって、障害者の人が乗りたいと思うかも知れない。働きに行きたいと思うかも知れない。ということが大事ではないですか？ 要求がないからバスを走らせないのではなくて、バスを走らせることによって、もしかしたら障害者の人が乗りたいと思うかも知れない。働きに行きたいと思うかも知れない。走らせることによって、いろいろな要求を持たれるのではないですか？」と言われたときに、日本にはそのような考えはない、と思いました。権利はきちんと保障しますが、何をしたいかは障害者自身が決めて下さい。という感じです。

私も青山彩光苑に勤めて5年目になりますが、今までの話を聞いていて、わからない点が多くあり勉強になりました。障害者自ら外に出ていかないとわからないと思います。健常者側から見ると、障害者側から見るとは視点も違うことを知って、すごく勉強になり、今後の利用者に期待したいと思います。

訴えのとき、署名などをしたことがありますか？

**平井：**バスや自動車などがあります。富山駅を変えて欲しいなど。駅の管轄はJRだけの問題だけではなく、市や県が絡んでくる問題です。要望書を持っていったり、署名を集めたりしてきました。

#### **九十 若葉さん（青山彩光苑職員）**

生活サービス課で寮母をしています。私の弟が障害を持っていまして重度で出かけたりはできないのです。少し昔までは車いすに乗せて買い物に行っても、周囲の目は冷やかでした。

#### **江沢 稔さん（青山彩光苑利用者）**

以前、久保さんと一緒に「生きる場センター」のときにパソコン通信で出会いました。インターネットがなかった頃です。

いろいろな話を聞いていて、これからも以前同様お付き合いよろしくお願いします。

#### **奥 美嘉子さん（青山彩光苑利用者）**

デイ・サービスを利用しています。最近思ったことはヤンチーなお兄さんだと思ったのですが、優しく接してくれました。

#### **前田 晋さん（青山彩光苑職員）**

私の父親は学校の教員をやっております。今年から障害児のクラスが1クラスできたということで、どう接してよいかわからないという感じです。私はどうしても障害者と健常者という目で見ている。先生方は心のバジアということで、実際にやっていることがありましたら、お話し下さい。どのように接してよいかを教えてください。

**浅木：**心のバリアが一番大きいので、普段やっても難しいです。「障害者」としか見

ないから、一方的な固定概念や思い込みがあると思います。直接関わったり、話したりするとわかると思います。

障害者だからといって、特別な接し方はないです。普段、皆さんが仲の良い友だちに話すように話せばよいと思います。だけど、障害を持っているから特別にもっと良いように接しなければならないとか、もっとこういうやり方があるというふうに、考えているのではなかろうか、というところがあります。

障害の種類別によりますが、基本的には普通に接する。「平井さん、おはよう。」という感じです。本当にコミュニケーションが取れなかったらその時に、どうすればよいかを考えればよい。

**平井：**僕の大学の授業の中で、体験をしたこととお話しします。僕の授業を聞いてレポートを書くのですが、「障害者はしゃべれるとは思わなかった」とレポートに書かれました。これに僕が点数を付けなければならなかったのですが、どんなふうに付けたらよいかを迷いました。現在、授業を行って6年目ですが、学生が話の中身を聞くようになってきました。

僕が大学の非常勤になったときに、養護学校を卒業した筋ジスで車いすを使っている人が富山大学に入るということになり、大学を変えたいといわれて、僕も非常勤に採用していただきました。僕と車いすの学生と一緒に大学に入っていました。

大学に入っていくと障害者の批判が結構あったのです。僕のレポートに学生たちが結構、批判を書いてきました。何を書いてきたかと言いますと「やれることもやらないのではありませんか。学校の中にスロープを付けようとするそれは無駄。なぜ、障害者のためにスロープを付けなければいけないのか。そんなお金があったら、研究室の教材をもっと良くして欲しい。」という意見が書かれていました。

僕はそれに対して、授業中で言ってきました。その頃、多くの学生は大学に来るけれど学力がない、と言われていた頃でした。大学の中で小論文を書く科ができてきました。大学の教授がレポート提出をさせても、レポートを書けない学生が多かったらしいです。

小論文を書かせるための学科ができたり、足りない部分を補う授業をしていました。その中に福祉のような課題もあったと思います。その他に僕以外に障害者の講師が何人かいたり、デイ・ケアを行っている方などを講師として招いて授業を行っていくこうとふうに、大学自身が変わってきました。そのような動きがあって、いろいろな人の話を聞けるようになって大学自身が変わってきたと思います。

ただ、やめていく方も結構いました。講義中に漫画を読んでいたたり、携帯電話をにかけていたり、結構ひどい状態でした。今、小学校などで学級崩壊がありますが、大学でも崩壊している所があるのです。

非常勤で雇われた方でも、こんな不真面目な学生を相手にしておられないということで、やめていく方もいらっしゃいました。僕は1～2年は自分で話をしていたのですが、4年目以降は、いろいろな人を招いてパネルディスカッションを行ったり、浅木さんと一緒に授業をやったり、いろんな形で授業を行っているのです。今年も僕以外のベストメンバーを入れて、障害者はこういうものではなく、いろいろな考え方があるのだよ。ということで、障害者のなかでもいろいろな性格、能力を持った人がいるということを学生たちに知

らせていく中で、「障害者はこういうものだ」を少しでもなくしていければと思ってやってきました。

**北口：**障害者週間に何かを考え、何かを実そして欲しいと言っているのですが、皆さんに対するアドバイス。お話を聞いていますと、自分たちも権利は自分たちで主張していかなければいけない。そうしないと世の中は変わらない。1～2回行ってだめでも、あきらめてはいけない、ということがずーとメッセージにあったと思いますが、いろんな方面、地域で暮らしている方、アパートで暮らしている方、施設で暮らしている方など、いろんな方に集まっていたのは、いろんな角度から物事を見ていただきたいという思いからです。

それで、私たちは何をしなければいけないか。私は今、障害を持っていませんが、どんな人間でも、いろいろなことを考えていかなければいけないと思います。

その課題に対して自分たちはどうしていかなければいけないかを考えるために、このグループワークに集まっていただきました。

**平井：**現在、僕は雇用主で浅木さんは雇われている人です。僕は1銭も給料をもらっていませんが、彼女に給料を払っています。雇用保険、健康保険もかけています。

なぜ、事業の話をしたかと言いますと、障害者が事業を行うことによって、障害者の雇用を増やすことも一つの目的にあります。それは自分ができること、障害者だからできる仕事があると思います。一つにはピア・カンだったり、いろいろな相談に乗ることなどがあると思います。いろんな学校に行って啓発をすることも、障害者でなければできないことだと思います。そのようなことを事業・仕事としてやれるように社会が変わってきたのです。昔は給料を払ってまでできる仕事はありませんでした。来年の4月から浅木さんのほかに3人を雇用し、もう一人は非常勤の予定です。給料はだいたい18万円の予定です。障害者が働ける場を作っていく、自分たちの夢を実現していくために、いろいろな制度を活用していこうと思っています。具体的に企画してきたものは？

**浅木：**最初は借金。会計的には真つ赤かですが、私たちを支援してくれる人たちからお金を借ります。1年目は～財団、～事業団から助成金をいただいて活動をしてきました。そうしたら偶然200万円の助成金をいただくことができました。

具体的に何を行ってきたかという、いろいろな講演会を3つぐらいやってきました。講演会の内容は「障害者の自立とは」「ピア・カウンセリングとは何だろう」

介助サービスの研修会。介助サービスに携わっている健常者、スタッフを集めて研修会をしてきました。自立生活プログラム。普段は親や身内、友だちに介助をしてもらってる人、一緒にいる人を対象に、自分の介助者を見つけてどこにでも行ったりすることも大事なのではないかと。親だっていつかは死んでしまうし、友だちもいつも同じ人ができるわけではないし、自分の介助をしてくれる人をたくさん持って、どこか出かけたり、生活することが大事なのではないかとということで、全く知らない人との一泊泊まり体験。

「ピア・カウンセリング講座」

北陸ではまだ少ないのですが、ピア・カウンセラーを養成する講座です。

**平井：**中学2年生になると「14歳の挑戦」というプログラムがあります。普通の中学だと1週間行きます。一般の会社、福祉施設に働きに行ったりしますが、僕らの所にくることになって、それをコーディネートしました。

**浅木：**何を伝えたいか。伝えるためには具体的にどういうことをやって中学生に伝えようかということで、1.週間のプログラムを作りました。具体的には月曜日はピア・カン体験、午後から中途障害の方の家に行って「どうして障害になったのか」などを聞く。私たちだけが障害者と言ってもどうしようもないので、いろんな人にあって欲しいということで在宅障害者の家に行っています。

他に、子供たち自身が車いすに乗って、コミュニティーバスに乗ったり、わざわざ乗りにくい市電に乗ったり、階段のある喫茶店などに行ったりして、実際に車いすに乗ってどこでも行ってみることをしています。階段のある所に来たら「手伝ってください。ここに入りたいのです。」と大きな声で言ったりします。

あとは、障害を持っている人とピアになって一日を過ごしてもらうのです。県の福祉課に行って福祉について話を聞いてもらう。

伝えたいことは言葉で伝えることはできますが、企画を立てるときにどういう企画を立てるが大事です。言うのも良いけれど、伝わらない部分もあるので、福祉とか言ってもわからないので、どうしたらわかってもらえるかが大変です。

**平井：**総合学習の時間があるのですが、学校の先生たちが何をやっていいかが分からない、と言われる中で、僕らが逆に中に入っていくことによって、一時間の授業を僕らがプログラムをしていく。先日、伺ったときに話しをしていたのは、七尾市内の小中学校へ講師になって行ったらどうか。障害者の問題は障害者だけではなくて、周囲を取り巻く大人たち、子供たちを含めたものを、皆さん方が企画できればと思います。やってる本人が楽しくなければいけない。

**浅木：**なかなか外に出ることによって。学校なんて卒業したらいきませんが、行ってみて感じることもあります。来てもらうことも大事だけれど、「逆に行っちゃえ」という感じですか。伝えることばかりではなく、こちらも感じることもあります。直接行くことが大事です。企画を立てることは難しいことなので、訴えたいことを箇条書きにする。環境を変えたいなどの思いがたくさんあると思います。それをどうしていこうかと考えていけばいいと思います。(これで終わります。)

## 2001年ピア・カウンセリングセミナー

NPO法人「自立生活支援センター富山」・浅木 裕美

日 時：2001年10月13日（土）

場 所：富山県民女性センター・サンフォルテ

今回のセミナーはいつもと違う雰囲気の中でやるんでしょうね…と思っている私がいましました。なぜなら、事務所にセミナーに関する問い合わせがジャンジャンあったからなのです。「それがどうして？」…それは、参加される方の層がいつもと全然違う方々になると思ったからです。私たちが今まで何か企画ものを行う時は、周知不足もあっていつも何らかのお付き合いがある方がほとんどでした。

そして当日、私の予想は見事の中!! 初めてお会いする顔、かお、カオ。参加人数は30人前後でした。とりわけ、新しい障害当事者の方が多くいたように感じました。また、ピアカンについて学んでおられる学生さんたちなど多方面からの参加も今までは余りなかったことです。うれしいです。

講演初日は、ピア・カウンセリングの歴史やなぜ、ピア・カウンセリングが必要なのか等についてお話いただきました。講演の後は、ピアカンをやってみようということでご参加いただいた皆さん一緒に円になって自己紹介をしたり、いくつかのグループに分かれて「今思っていること」についてお互いに話しを聞きあいました。ご参加いただいた方からは、「いろんな人と出会い、いろんな話しが聞けてよかった」、「安心感を感じることができた」、「皆さんの意見を聞いて広く考えられるようになった」などの声がありました。

## 2001年ピア・カウンセリングセミナー 2日目

2001年10月14日（日） 新川文化ホール

講演2日目は魚津で行いました。この日にご参加いただいたのは、地元の民生委員さんが多かったのですが、前日のセミナーのことが新聞に掲載されていたのもあり、「今日の新聞を見てきました。」という方も多くいらっしゃいました。この日も30人前後の方がご参加くださいました。

講演では、ピア・カウンセリングの基本的なことについては前日と同様でしたが、その他に「それぞれの立場からの自立生活について」ということで、今井さんのお話のほか私、浅木裕美も私の立場からお話をさせていただきました。講演の後のピアカンをやってみよう、では、これも幾つかのグループに分かれてアプリシエーション（誉めあい）をしました。日常生活の中で誉める、誉められるということはあまりないと思うのですが、自分の立場を肯定されないことも多くあります。そんなことから、お互いのいい所を伝え合うことで自信につなげていくことを目的とするものです。

最後に、今回のセミナーでは様々な障害を持った方がたくさん参加されたり、セミナーに参加された方同士で親しくなられたり、セミナー後に「ピアカンを受けたい」と事務所を訪れられたりと今までになかった動きがあるのでうれしいです。また今回、魚津市障害者生活支援センターさんとともにこの企画を行えたことはピアカンのより一層の普及等につながる意味でもとても有意義なものだと思いました。

## 介護について

富山生きる場センター  
職員・田中 郁代

大学時代、初めて障害者の人たちと出会い関わるようになりました。

最初は「介護をしてほしい」と言われて具体的に何をすればいいのかわからず不安を感じていました。

失敗も数々あります。言語障害のある人の言葉を聞き違えたり、銭湯の洗い場で障害者の人を抱えたまま転んでしまったり、段差に気づかず車いすごと横転させてしまったりと、今、思い出しても冷や汗が出ます。

当時（20年ほど前）は、障害者が地域で暮らすことになかなか理解が得られず、駅で単独乗車は危ないと切符を売ってもらえずに駅員とケンカになったり、バスやタクシーに乗車拒否されたり、街で通行人に階段の介助を頼んだら「お前がひとりやれ！」と怒鳴られたりもしました。

「大変ですね」「ご苦労様です」と声をかけてくれても、手は貸してはくれない人たちに腹を立てながらも、自分も障害者の人たちと出会ってなかったら果たして手伝っただろうか。自分自身の反省も含めて、現在も障害者のことは専門家や家族がやればいい、自分たちが関わるべき問題ではない、という人の方がまだまだ多いように感じるのは私だけでしょうか。

私にとっての介護は障害者の人たちと外に出ることでした。行く先々で迷惑がられ、いやがられても出かけて行くことが障害者が社会に出ていくための最初の一步だと考えていました。駅員に「障害者が来ると他のお客さんに迷惑だ」と言われても、飲食店で「混んでいるから車いすはお断り」と言われても、めげずに出かけて行きました。駅にエレベーターがついたり、スロープ付きバスが走ったりしている現在の状況を見て「便利になって良かったね」という人がいますが、何もせずにいたら今のようにはならなかったのではないかと思います。息の長い障害者の人たちの働きかけの結果だと思っています。

現在、働いている作業所にも小学生や中学生がボランティアを希望してやってきます。学校では「総合的学習の時間」に障害者を呼んで話を聞くという企画もあります。しかし、それで障害者の社会的地位が確立されたのかといえば疑問が残ります。話しかけている障害者をさえぎって介護者に用件を聞いてくる人もまだ多く、介護をする側としては根気強く「私ではなく、話している本人に聞いて下さい」と言い続けるしかない状況に変わりはありません。

学生時代に精神障害者の人たちに関わり、夕食を作りに行ったり、病院に一緒に行ったりしていましたが、その必要性をきちんと捉えられず、徐々に疎遠になりました。

また現在、知的障害者の方の金銭管理もしていますが、成年後見制度との関連でなんらかの法的な裏付けのあるものに変える必要があると思います。そういう意味から、精神障害者・知的障害者の必要としている「介護」とは何かを考えていくことが私自身の今後の課題となりそうです。

## バリアフリー調べ&交流会

七尾市立有磯小学校6年生&青山彩光苑利用者

以下の作品は、七尾市立有磯小学校6年生と青山彩光苑利用者の皆さんが、バリアフリー調べ&交流会を行いました。その交流会の様子を書きました児童の文集が編集者に届けられましたので、有磯小学校の御協力により転載させていただきました。

### バリアフリーを調べて分かったこと

田島 さくら

10月15日青山彩光苑の人たちが、有磯小にいらっしゃいました。私たちの勉強のためにわざわざ。いよいよ発表開始。そして私たちグループの番が来ました。目の前のおじさんやおばさんたちを見て、緊張してきました。でも、すぐ緊張がほぐれました。ちゃんと聞き取れるように、はきはきと大きい声を自分なりにだしました。そのせいか質問に答えてくれました。車いすに初めて乗ったときは、自分で動かすときは手が痛かったそうです。しかし、すぐ慣れて平気だそうです。

私たちの発表にあった「障害を持っている人のためにどんな設備がありますか」その答えが・・・点字ブロックです。しかし、その時私は気づいていませんでした。何と点字ブロックには、いい面と悪い面があったのです。簡単に考えると点字ブロックは目が不自由な人には便利です。だが、一方の車いすの人たちには、はっきり言って不便です。ごつごつして進みにくいのです。私は、そういう所を直したかったです。まさか点字ブロックが不便だなんて思いもしなかったのです。そして全グループの発表が終わりました。元気なおじさんたちを見ていると私も楽しく元気になってきました。一見元気そうに見えても本当は、すごくつらいのかもしれない。トイレに困ったり、通路のこと、階段などの段差。きずかないだけでまだまだあるでしょう。

それでもおじさんたちは、明るく笑ってます私もその笑顔につられて笑います。こんなに元気に笑えるおじさんたちはいい人だなあてと思いました。私は知らないうちにあこがれていました。

これからも、笑顔をなくさないように不便が一つもないバリアフリーが増えるといいですね。とにかく、ずっと、ずっと、その笑顔が似合う、元気なおじさんたちのままでいてほしいです。

### 交流授業で分かったこと

林田 和樹

10月15日(月)の3時間目に、交流授業がありました。そして、2時間目に、その準備がありました。

交流授業というのは、足が不自由な人と一緒に、6年生(僕たち)が調べたことを発表したり、質問したりすることです。

足の不自由な人は、「10時15分にバスに乗ってくる」と先生が言っていたのに、10時5分前に、もう学校へ来てしまいました。だから、ちょっと緊張しました。

始めに、障害のある人をバスから降ろしました。次に、一緒に世話をする人を決めて、「今日、一緒に世話をするのは林田和樹と寺下遼司です。分からないことは、僕たちに、言ってください。」と紹介などをしました。そして、僕が体育館まで車いすをおしてゆきました。(その後トイレ行き・・・)

発表が始まりますと、質問したりした班もいました。それぞれの班で、質問したことで、分かったことは、「生まれたころから、足は不自由ではありませんでした。」「20歳ごろから足が不自由になりました。」など言ってくれました。でも、質問に答えてくれたのは、少なかったです。(2、3人)

障害のある人は、質問は分かってくれたけど最後の班のクイズは、分かっていませんでした。吉田くんは、2問分かりました。

風船バレーは、顔面をねらってきてすごく強かったです。強くなったら、またやりたいです。

最後に、お礼として、七尾市歌を踊りました。皆喜んでいました。僕は、とっても勉強になって、うれしかったです。最後に、障害のある人を見かけたら「助けたいです。」と思いました。それに、「青山彩光苑に、行きたいです。」と思いました。

## 楽しかったバリアフリー交流

東谷内 静

青山彩光苑の人たちと、バリアフリー交流があり私は、女の人のおせわをしました。その女の人を、トイレへ案内した時その女の方は、坂やスロープを降りるときとても怖いですと、言っていました。私も去年車いすに乗った時、坂やスロープが一番怖かったのを覚えています。

障害をもっている方と話していたら、その方は、「街で障害を持っている方こまっていたら手助けしてあげてくださいね。」とおっしゃいました。私は「どんどん手助けしてあげましょう。」と思いました。

風船バレーをしていた時とても、強かったのが正直いってビックリしました。私は余りやったことがなかったのでつい椅子から、立ってしまいました。障害をもっている方は私たちよりも気がもしかしたら、強くて何も力もくじけずにやっていたから、何でもやればできる人たちなんだなあーと思いました。

そして、私たち6年生の発表やダンスを一生懸命見たり、聞いたりしてくれてとてもうれしかったです。私は、またバリアフリー交流をしたいです。また会える日を楽しみにまっています。とっても楽しかったです。

## 私のホームページ

このコーナーは福祉関係の情報を発信している方々のホームページを紹介します。あなたのホームページの紹介を600～800字程度にまとめ、[petero@po3.nsknet.or.jp](mailto:petero@po3.nsknet.or.jp)までお送り下さい。

## ケアマネめざし

<http://www.fan.hi-ho.ne.jp/evergreetree/>

三重県鈴鹿市・梅本 裕多加

厳密にいうとメールマガジンが主で、HPは属になります。

ご承知のように、老人福祉は2000年4月から従来の措置制度から契約による介護保険制度へと大きく流れが変わりました。そして、利用者のケアマネジメントの軸になるのがケアマネージャーです。

毎年実施されるケアマネージャー試験の教科書である基本テキストに沿って毎日勉強する方へ毎日2問題配信しています。

私自身も制度前にケアマネージャー資格を取得したのですが、このまま制度の中へ突入したのでは……。もう一度勉強し直そう……。それなら次回の受験者の方にもお役に立てるように！とノート代わりにマガジンを発行しました。当初はフリーマガジンでしたが、まぐまぐさんが有料サイトを立ち上げた時に一緒に付いて行きました。現在は月200円です。維持費に充てています。

また、別途に実施する模擬試験時には、参加者に図書券等を配布して還元しています。

HPには購読者からの勉強方法等の情報もあります。講読はクレジットカード決済です。ぜんちゃんから何とかならないか？と言わやまぐまぐさんに善処お願いしています。(彼は購読者でした！)

毎日、勉強される方、ごいっしょに勉強しましょう。

## みんなの広場

### 平井 誠一さんのお話を聞いて

鹿島町・奥 美嘉子

平井さんつてどんな人なんだろう……。とお会いするまでワクワクしていました。お会いしてお話を聞いているうちに面白くて、お茶目な方だけどすごくパワフルな方だなーと思いました。

一番印象に残ったのは”笑顔がとてもかわいい”とこでした。私は、お話を聞いてる中でいくつものことが「そうそう、そうだよね」と共感できることが何度もあり、やはり同じことを感じているんだと思いました。

それから私自身、親が人目を気にして外出したからたけどあまり外出できなかったこと

や、外出しても人目は冷ややかだった体験などから、親や健常者に理解してもらうためには、まず自分から行動を起こしていかなければ、何も解決していかないと思い、時には親に文句も言われ連れていってもらいました。とても勇気のいることでしたが、平井さんのお話を聞いてこれでよかったんだと確信し、もっと頑張ろうと思いました。

そこで、興味があったのは、平井さんのしているお仕事でした。内容を聞いていた時、私が求めている仕事にとっても近かったのがこれだ！！と思いました。特に、ピア・カウンセリングに興味がありました。

一つ思ったことがありました。障害を持っていても健常でも、心にバリアーがあるのは同じだと思いました。友達の悩みや相談を聞いたりしているのでもし、ピア・カウンセリングの資格を取れば、健常者から障害者になった私なので、少しは健常者の気持ちも解るので障害者だけでなく健常者の心のバリアも取れる人になればと思いました。

平井さんにお会いできて良かったです。機会があればもう一度お会いしてお話ができればと思いました。

## 障害者は、なぜ、施設生活を強いられるのか、療護型施設の役割を問う

七尾市・山口 智子

私が学校を卒業した当初、「障害者は、社会の片隅で、おとなしく生きていくのが、当たり前」と言うような考え方をしている仲間が、たくさんいました。そういう仲間には「いいえ、違うんですよ。障害がある者こそ、堂々と社会の一員として積極的に生き、発言していく、必要があるんですよ」と言って、仲間を外に連れ出していました。たまたま、以前に入所していた施設は、地域に開かれた施設だったため、そのようなことが可能でした。

何で私がそのような発言をし、行動をしたのかというと、人間として当然の権利を主張しなければ、いつまでも社会が障害者に対して、差別や偏見がなくなっていくはずがないと思ったからです。

仲間の中には、「障害を見せ物にして、恥ずかしいです。人様に迷惑をかけてまで。」という人がいました。そういう人に限って、社会的な刺激が不足していたり、社会と離れた生活を強いられていたり、情報が不足しているしてことを物語っていると思いました。

先輩が私と出会うまで、社会的な刺激など少なかったため、閉じこもりがちな生活をしていたらしいです。

その先輩が、後年に「君の影響で差別や障害者問題についてこの関心を持ち、考えるようになって、積極的に外出などできるようになって、機関紙の発行の仕事ができる」と話してくれました。今でも親しく付き合っています。

「障害者ですから、社会の片隅でおとなしく生きていくのが当たり前だ」というような、考え方をしている人が今でもいます。その多くは、親や兄弟、教育者あるいは役所の人た

ちです。だから、私をも含めて多くのとりわけ重度の障害者たちは、社会と離れて施設生活をせざるを得ないのだと思うのです。中には親や周囲の反対を押し切って、あらゆる手段を使って、アパートなどで自立生活している仲間がたくさんいます。

私も一時はその方法に考えて実行しようとしたのですが、障害者ということだけで、親や役所の人たちに、説得しトラブルをおこしてまで、自立生活をしなければいけないのでしょうかと、疑問に思ったので実行しませんでした。一般の人と同じような形で、自立生活できる制度のようなものが、あるのなら施設なんか、利用しなくっても良いと思うのです。原則として、現時点では、制度化 法律化されていませんから、どうしても、障害者十大規模な施設という考えで、多くの重度の障害者は、社会と接点をもたず、隔離させられた生活を強いられるのです。

中途障害の方から、よく「施設の実体を、初めて知らされました。ノーマルな生活がアブノーマルな生活を、強いられるのは、施設の運営内容や社会的な問題があるからです。」といわれます。それも、そのはずだと私は思います。障害者問題など、ひとつごとのように考えて、生きていたからではないでしょうか。

現在、私が入所している施設は、今でこそ、運営内容が変わり、地域社会に開かれた、施設づくりを目指し、行事を通して交流が可能になり、利用者自らの判断で、金銭の取り扱いや外出などが可能になりましたが、私が入所当初は金銭の持ち込みも限られ、外出などはもちろん、体調が悪くなっても、病院さえ行くことも、許されていませんでした。私は、驚いて「こりゃ、えらい所に来てしまった」と思いつつも、ならば、職員の持つ障害者観を、見直させなければいけないと思って、施設のリーダーに、直接、私の考えなど、ワープロで伝えて来ました。「施設であっても、よりノーマルに近い形で、生活サービスの提供を」と訴えました。だって、同じ人間として、生きる社会において、人間らしい、生き方を望むのは、当然でしょう。その意味で私たちが、立ち上がり主張していく必要があるのです。

療護型施設の場合、長期入所が可能だけではなく、利用者が、人間として、ノーマルに近い生活が、保障されなければならないと思います。もちろん、施設という集団の中ですから、規則や決まりも、守らなければならないわけです。けれど、個人の生活を最優先に、サービスが定着する必要だと考えます。

## ふれあいフォーラム21

### オラとあんたのまちづくり・共働作戦

#### -ふつうにくらせるしあわせ-

と き：平成14年2月24日（日）

午後1時15分～5時（開場午後0時45分）

ところ：コスモアイル羽咋 大ホール

主 催：ふれあいフォーラム21実行委員会

社会福祉法人羽咋市社会福祉協議会

福祉のまちづくりはわたしたちの手で。わたしたち一人ひとりが暮らしに関心をつことが街づくりの第一歩。普通に暮らせる幸せとはどんなことなのか一緒に考えてみませんか？

#### ●講演

『ともに生きる社会をめざして』

-ふつうの生活ってなんどすか-

#### ●講師

自立生活問題研究所所長

谷口明広氏

（たにぐち あきひろ）

1956年、京都市生まれ。生後間もなく重症黄疸のために脳性マヒとなり、四肢および体幹機能障害で車いすを使用している。5才から6才にかけて足部に13カ所の手術を受け、京都市では入れる学校がなく1年遅れで大阪の堺養護学校に入学、高等部まで進む。卒業後、障害者に門戸を開いていた「桃山学院大学」の社会学科へ進学する。大学卒業後、同志社大学大学院社会福祉学専攻に進み、2年次に障害者米国留学研修制度に合格、米国カリフォルニア州バークレー市にあるCIL（Center for Independent Living）で自立生活概念やアテンダント制度を学ぶ。

以下の詳細は、前号の「HSK季刊わたぼうし」をご覧ください。

#### ●ちょっと変わったパネルディスカッション

コーディネーター

北陸学院短期大学人間福祉学科長

千葉 茂明 氏

パネラー

パネラーは会ってからの楽しみ！

当日は手話通訳・要約筆記・会場内介助が付きます。

●その他

施設作品販売（午前10時オープン）  
各サークル・施設紹介パネル展示  
一時保育あります。（要予約）

●問い合わせ先

〒925-8506  
石川県羽咋市鶴多町亀田17番地  
社会福祉法人・羽咋市社会福祉協議会  
Tel : 0767-22-6231 Fax : 0767-22-6189

マイ・ブックスルーム

あなたは私の手になれますか

小山内 美智子著

発行所：中央法規出版

定価：本体1,575円+税

脳性麻痺の障害がある小山内美智子さんが介護の受け手側から書かれた一冊です。  
読んでいて私が幼いころ、施設で体験したことが書かれており、全くその通りだと思っ  
ながら読みました。

食事、着替え、入浴、排泄など、一つひとつの項目についてどのような対応が好ましい  
かを詳しく書かれております。

アパートで自立生活をしていく上での介護者との人間関係、障害者地震のモラルなどを  
教えられました。

また、介護講習会などで、介護されたことがない人に教材になるのではないでしょう  
か。この本に答えが書かれています。（解説：桶屋 善一）

編集後記

今年の冬も暖冬が続いておりますが、皆さんいかがでしょうか？ 「HSK季刊わたぼ  
うし」が創刊された昭和60年ごろは豪雪が数年続いておりましたね。本当に楽な近年の  
冬ですね。

さて、12月9日に青山彩光苑にて行われました谷口明広さんの講演会にたくさんの御来  
場を頂き盛大に行われました。来る2月24日（日）にコスモアイル・羽咋においても谷口  
さんの講演会が行われます。2回の講演会のまとめができましたら、報告をさせていただきます。多少時間がかかりますのでお待ちください。（Z・O）

## 川柳裏表紙

うぐいすの 声を求めて 録音機

これは私が川柳を作りはじめた昭和40年代頃の句です。編集部からこの句の説明を求められて困った。

今はビデオテープとか、小鳥や動物や虫の鳴き声が出る電子辞典等があるが、当時はラジオからテレビの時代が変わろうとしている時で、小鳥の声を録音するために山奥へ、谷へ、森へ、林へ、海岸へと録音機を持って行く姿が放映されて、それをそのまま詠んだものです。特別に深い意味も思い出もないのです。立春も杉て暦は春です。うぐいすの鳴き声もやがて聞けるでしょうね（比）。